

被服衛生学セミナー開催記録

回	総合テーマ	会場	開催日
1.	衣服気候について	富士教育研究所・裾野	1982. 4. 2~3
2.	ヒトの体温生理および被服の温熱特性	神戸ポートピア・神戸	1983. 4. 2~3
3.	clo値を考える	箱根静雲荘・箱根	1984. 3. 30~31
4.	衣服気候を考える	神奈川県立婦人総合センター・藤沢	1985. 3. 27~28
5.	衣服圧を考える	大阪市立労働会館・大阪	1986. 11. 6~7
6.	発汗の生理と被服汚染	玉山会館・名古屋	1987. 11. 6~7
7.	皮膚感覚と衣服	福島グリーンパレス・福島	1988. 10. 13~14
8.	衣服内の熱・水分移動を考える	横浜郵便貯金会館・横浜	1989. 9. 25~26
9.	寝床内気候と寝具	広島ガーデンパレス・広島	1990. 9. 20~21
10.	高齢者の生活行動と衣服	京都パストラル・京都	1991. 9. 26~27
11.	北方圏における衣服と温熱環境	藤学園セミナーハウス・札幌	1992. 8. 30~9. 1
12.	生体生理現象の測定とその被服衛生学への応用	文化学園軽井沢山荘・長野	1993. 9. 12~14
13.	高齢化社会における被服衛生学の役割	ラフォーレ修善寺・修善寺	1994. 8. 29~31
14.	アジアの高温多湿地域における被服衛生学の問題	ラフォーレ修善寺・修善寺	1995. 8. 25
15.	生体機能と衣服	尚綱女学院短期大学・名取	1996. 8. 21~23
16.	電磁波と衣生活	こまばエミナース・東京	1997. 8. 27~28
17.	21世紀における被服衛生学への期待	倉敷ファッションセンター・倉敷	1998. 8. 24~26
18.	いま、被服研究に求められているもの・・・心地良さの心理・生理	京都テルサ・京都	1999. 8. 25~27
19.	被服衛生学 ―明日への視点― 高齢者問題を学際的に考える	ホテルメトロポリタン秋田・秋田	2000. 8. 7~9
20.	被服衛生学セミナー創立20周年記念	東レ総合研修センター・三島	2001. 8. 29
21.	人間にとって被服とは何か -ファッションと健康の両面からのアプローチ-	長野市勤労者女性会館しなのき及びサンパルテ山王・長野	2002. 8. 25~27
22.	アレルギーのはなし	実践女子大学・日野	2003. 8. 25
23.	ストレスと今求められている衣服	九州大学国際交流プラザ・福岡	2004. 8. 23~24
24.	健康を支える衣服力	神戸ファッション美術館・神戸	2005. 8. 8~9
25.	着ごごち・寝ごごち・履きごごち	エル・パーク仙台・仙台	2006. 8. 7~8
26.	被服衛生学のこれから ―戦略と戦術―	和洋女子大学佐倉セミナーハウス・千葉	2007. 8. 7~8

【巻頭言】

「裸のサル」から「ウェアラブルコンピュータを着たヒト」へ

部会長 栞原 裕 (九州大学大学院 芸術工学研究院)

デズモンド・モリスが1967年に出版した著書で、彼は、ヒトを表す言葉として「裸のサル」を用いた。このように、ヒトが他の動物と大きく形態学的に異なっている点は、「直立二足歩行をすること」、「大脳が発達していること」、「犬歯の退化した独自の歯列を持つこと」などの外に、「毛皮を身に付けていないこと」が挙げられる。特に哺乳類では、水中動物（イルカなど）や大型動物（ゾウなど）以外では、そのほとんどが、全身に厚い毛皮を身に付けている。500万年前に、霊長類（チンパンジー）から初めて別れて出現した人類の最古の祖先の猿人も、チンパンジーと同様に毛皮を身に付けていたものと考えられている。しかしながら、アフリカで進化した原人は、ライオンや狼のような鋭い牙や、チータのような俊敏な足を持たないため、獲物を得るためには、日中、長時間をかけて狩をしなければならなかった。そのため、直射日光よけの毛皮が、放熱のためには邪魔となり、毛皮を脱ぎ捨て、皮膚に汗腺が発達し、気化熱により放熱を促進したものと思われる。

ヒトが、再度、毛皮（被服）を身に着ける契機となったのは、人類の出アフリカである。温暖なアフリカから、寒冷なヨーロッパで生活するには、保温材としての被服が不可欠となった。ネアンデルタール人がヨーロッパや中東で活動したのは、20万年前から3万年前位で、彼らが生きた時代のヨーロッパは、ツンドラ並みの気候であったと思われる。彼らには、その当時、衣服を縫う技術はなかったため、着用していたのは毛皮だけであったとされているが、毛皮着用によって寒冷に良く耐えた。アフリカに、新人が誕生したのは、およそ20万年前とされているが、10万年前には、第二次出アフリカを経験した。4万年前にはクロマニオン人がヨーロッパに移り住み、現代ヨーロッパ人の祖先となった。彼らは、精巧な石器を使用し、縫い針で衣服を縫い、寒さに対抗することが出来た。

ヒトは、その後の技術の発展により、多くの繊維素材を利用して、各種の衣服を作製してきた。また、衣服そのものを文化として楽しむことも数千年間に渡り行なってきた。さらに、最近では、コンピュータを衣服のように身にまとう、ウェアラブルコンピューティングも現実的になっている。電装服、冷房服、ディスプレイ服などが、その一例であろう。このように、衣服の役割は、寒さから身を守る毛皮の代用品から、「便利・快適」、「安全・安心」さらには「豊か・楽しい」生活を送るための装置と大きく変化している。被服衛生学は、衣服の従来からの役割や、未来の役割までも目を向け、ヒトに役立つ衣服の発展に貢献することが求められている。